

都留市史

通史編

大月市岩殿にある岩殿城跡は、早くから小山田氏の詰城であるというのが定説であった。『甲斐国志』の記述によって定説化したものであるが、近年これに対して武田氏の国境警固の支城であったとの説が強くなっている。代表的なものは萩原三雄氏の意見であって『岩殿城の史的考察』『山梨考古学論集Ⅱ』、その立地条件からして詰城的なものではなく、より積極的な軍事的要害であって、国境警固のための武田氏の直轄経営の城であったとの見解である。その傍証として（古代・中世二三〇）、



岩殿城址大手口

定
 幕合の
 新左衛門 大師の 小笠原の 百々の
 新左衛門 縫殿右衛門 助右衛門 源次郎 四郎右衛門 新五左
 衛門 寺辺の 徳行の 曾根の 黒駒の
 孫右衛門 助右衛門 新七郎 新左衛門
 右拾人、岩殿に在城せしめ、御番普請等疎略なく相勤むるの由に
 候の条、郷次の御普請役を御赦免なされ候の間、自分の用所を申
 し付けらるべきの由、仰せ出さるるところなり、仍って件のごと
 し、

天正九年 辛巳 土屋右衛門尉

三月廿日〇 (竜朱印)

奉之

萩原豊前

をあげており、武田勝頼が宛名の横目付衆の一人であった萩原豊前守に命じて、国中寄子衆十人に岩殿城在番と普請役を課している内容から、武田氏支城説の根拠としたものである。これによって、武田氏の最末期のこの時期に岩殿城に武田方から在番衆が加番として送り込まれたことは確かであるが、まさに領国崩壊の危機に際して葦崎の地に新府城を急造した行為と同じ動きとみられないこともなく、この文書のみで武田氏支城説を説くのは

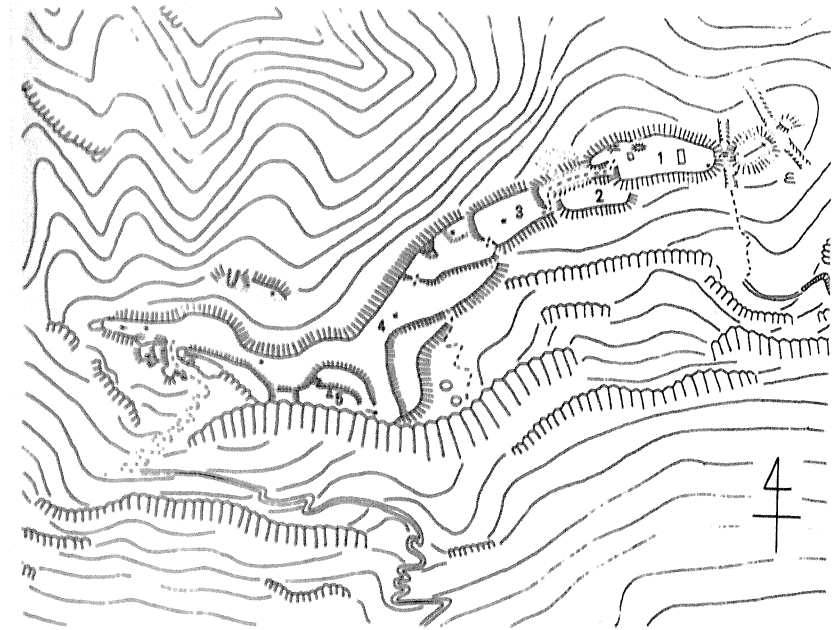


図2-4 岩殿城址（作図：池田光雄「中世城館址」資料編古代・中世）

どうかと思われる。萩原氏はこの点を補強するため、小山田氏の支配領域が大月以北には及んでいなかったとの先行研究を援用しているが、後述するようにこの点も更に検討の必要があろう。問題は、この城がいつ誰によって築造されたかであるが、それらを的確に示した文献は皆無であり、その点では『甲斐国志』『大月市史』ほかが主張する小山田氏築城説も依然として有力な説として残っているものである。